

ヘルマン・バウジンガー  
民俗研究の特質について  
(1980)

Hermann Bausinger,  
*Zur Spezifik volkskundlicher Arbeit (On the Characteristics of Folklore-Studies)*  
(1980)

(訳・解説)

河 野 眞

translated in Japanese by Kono Shin

愛知大学元教授

*Ex-Professor at Aichi University*

目 次 (原文には区分が設けられていないが、読みやすさのために訳者の判断で小見出しをつけた。)

1 転換から 10 年を経て .....	128
2 社会学との比較 .....	129
3 問題点の整理 .....	131
4 民俗学の独自性 .....	134
5 文化の総体 .....	136
6 ニューファンドランド島の絨毯にちなんで .....	138
7 外国人労働者問題における社会学と民俗学 .....	140
8 価値規範の重み .....	143
9 《ソフトな》方法と《ハードな》方法 .....	145
10 《ソフトな》方法に託された課題 .....	147
訳注 .....	149
解説 .....	152

## 1. 転換から 10 年を経て

《民のいとなみからの決別》：このタイトルの討論集がテュービンゲンで刊行されてちょうど 10 年経った<sup>1)</sup>。以来それは、屢々、民俗学をめぐる大転換の兆候とも、それどころかシンボルとも評されてきた。専門分野の内部だけでなく、外部においてもそうであった<sup>2)</sup>。それはまた、\*《フォルクスクンデ（民俗学）》からの部分的な決別というもう一つの兆候でもあった。さらにこの十年には、専門分野の呼称をめぐっても活発な議論が起きた<sup>3)</sup>。専門分野の課題について受け入れ可能な定義をめざす集中した営為、たとえば\*ファルケンシュタインにおける討論会が正にそうだったが<sup>4)</sup>、それまた必ずしも求心的にははたらかなかった<sup>5)</sup>。もっとも、特に討論の直接の延長戦上で、個々の研究所の名称や勉学の進め方の表示について様々な言い換えがおこなわれた。頻繁に選ばれたヨーロッパ・エスノロジー（Europäische Ethnologie）は、一方では国際的なスタンダードに合わせるための単なる翻訳語として疎まれはしたが、他方ではある種の切込み、すなわち新しいパースペクティブの探求でもあった。ただただ正統性の継続に目を向け、文化人類学や経験型文化研究のような半端物が騒ぐ傍系を遺産継承からはずす系図学者が怪しげなことは言うまでもない。そうした人々は、人的・機構的な重なりだけからも否定されて然るべきであろう。すなわち、フォルクスクンデ（民俗学）という名称を掲げる機関と昔も今もつながっているからである<sup>6)</sup>。

高揚した祝賀講演は別として、相も変わらずこの専門分野のディシプリンを云々することになるが、あながち咎められはしないだろう。なぜなら、幾世紀を通じて収集された文物（膨大な収集だけでなくアンケートや整理の仕方をも含む）は、新機軸を言い立てるだ

1) *Abschied vom Volksleben*. (Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen, 27.Band) Tübingen 1970 (Redaktion: Klaus GEIGER, Utz JEGGLE, Gottfried KORFF).

2) Peter Reinhart GLEICHMANN, Zweite Tagung des Arbeitskreises für Kulturosoziologie. In: Zs.f.Sozioologie, 8 (1979), S.102-104, hier S.103.

3) Hermann BAUSINGER, *Kritik der Tradition*. In: Zs.f.Vkde, Jg.65. (1969), S.232-250, 特に S.245-249.

4) 参照, Wolfgang BRÜCKNER (Hg.), *Falkensteiner Protokolle*. Ffm. 1971. このプロトコールは、企劃に係する文書と、討論会「ドイツにおける民俗学（フォルクスクンデ）」(Volkskunde in Deutschland) (1970 年 9 月 21-26 日) 報告と質疑応答を併せている。しかしディスカッションの再現は、不明瞭な録音のために欠陥が多い。；またこれに關聯して次の報告を挙げておきたい。Martin SCHARFE, *Notizen zur Volkskunde*. In: Württ.Jb.f.Vk. 1970, S.124-139. ファルケンシュタイン討論会は、シャルフェを土台にして成り立ったからである。

5) 外面的な原因は、民俗学の諸学派の代表者が参加しなかったことにあるが、實際の影響からは、それ自体、遠心的な力がかなり強くなってきたことの兆票であった。

6) 「ドイツ民俗学会」(Deutsche Gesellschaft für Volkskunde) の機関誌である本誌もその一例である。その他、各地域の団体や博物館やアーカイヴもここで挙げてよいだろう。

けで押し退けなどできないからだ、それだけではない。むしろ、昨今の数多い手直しやある種の新路線の全てあるいはほとんど全て（それにあたってどんな特殊なレッテルを掲げるかは大した問題ではない）詰まるところ民俗研究の性格を帯びているからである。

## 2. 社会学との比較

目下多く見られる改変の主なものとして社会科学への接近がある。フォルクスクンデは《社会を人間的なものにする批判的社会科学の一部》との理解がよく行われる<sup>7)</sup>。しかし、社会科学への帰属に異論が発せられる場合でも、(広義での)社会科学の理論が、さまざまに分岐する部分領域の結節点であることが明らかになると言えそうである。数年前、\*ビャルネ・ストックルンドは、ヨーロッパ・エスノロジーの状況を《スキュラとカリブデイスの間》([訳注]ホメロスの「オデュッセイア」に描かれた二つの怪物の棲む海の難所、転じて両悪・ジレンマ)と評した<sup>8)</sup>。ストックルンドは、部分領域が専門化する危険を多くの頭部をもつ怪物スキュラの脅威に譬えた。と共に、カリブデイス、すなわち《すべてを呑み込んで押しつぶし、一様のかたまりにして吐き出す巨大な渦潮》とは、《危険な吸引力と一様化への動き》を帯びた社会科学を指している。ちなみに社会学者は、ハイフンでつないだ多様な社会学の乱立を常に嘆いている。しかし同じ問題が、フォルクスクンデでは先鋭化された形で現れる。ここではハイフンでつなぐ操作すらなされず、自立性をもとめるかのような名称が立ち並んでいるからである。メルヒェン研究、歌謡研究、家屋研究、道具研究、等々。これを見れば、社会科学が繋ぎ金具への指針になるのも当然だろう。客体への関わりが強い研究分野において個々の領域を横に聯結するのは、機能的な聯関への強い関心なのである。

こうした動きが現れたのは必ずしもこの十年に限られないが、アクセントが強まったのはその辺りである。だからと言って、気に食わない一切合財を《学生運動》の産声として咎めるのは明らかに公正さに欠ける([訳注]街頭運動が頂点に達した1968年以後も大学生たちの批判活動は続いた)。しかしそれ以上に間違っているのは、自信満々で《決別》を告げる人々であろう。それを見ると、ちょうど、反抗して、もう帰らないと言って飛び出しはするが、家の戸口で引き返す小学生をもった親のような気分させられる。たしかに覚醒は起きた。しかし家出も覚醒も長続きするわけではない。むしろ今日問うべきは、そしてどうなったか、であろう。

7) Dieter KRAMER, *Wem nützt Volkskunde?* In: Zs.f.Vk. Jg.66 (1970), S.1-16, hier S.7.

8) Bjarne STOCKLUND, *Europäische Ethnologie zwischen Scylla und Charybdis*. In: Ethnologia Scandinavica, 1972, S.3-14.

1970 年前後に始まった理論論争は、決してまとまりに到達したとは言えない。最近の一聯の作業もそれを裏付けている<sup>9)</sup>。しかしこの十年の研究の文献を概観して明らかになるのは、数の面では個別研究がうなぎ上りの観を呈することである。数を見る限りでは、学生や大学卒業者の参加が当初は徐々に、そして時と共に急増したことが判明する。しかし、材料を積み上げるのは人足で、片や専門貴族は空疎な理論にふけているといったことではない。理論に関するディスカッションが《新しい音階》(といってもまずは個別研究の段階だが)をもとめて枝葉をひろげるのを許さず、保守的な力もおおまな。とまれ、新たな動きは、自己のパースペクティブとメソッドを試すという課題に挑戦している。

それゆえ、昔ながらの項目に束縛されないかたちで着手された一聯の領域には、やはり関心をそそる試みがあると言えるだろう。たとえば労働者文化との取り組みなどである<sup>10)</sup>。このテーマでは昔からの分類原理である儀礼と行事、伝説と昔話、家屋と道具などの章立てに合うような論集を編むと却って妙なことになるのはただちに分かるだろう。余暇研究<sup>11)</sup>やメディア研究<sup>12)</sup>は言わずもがな、町村体研究<sup>13)</sup>でも新しい動きが起きている。それどころか、町村体研究では、概括的に社会科学的と言えるようなパースペクティブが歴史的研究にも影響をあたえたことがただちに見て取れる<sup>14)</sup>。

9) 最近 2 年間に諸誌に発表されたもので注目すべきは論者として次を挙げておきたい。ゲルント (Helge GERNDT) In: *Ethnologia Europaea*, 10 [1977-78], S.1-32); フントと D. クラーマーの共編による物質面での文化理論の論集 Wulf D. HUND, und Dieter KRAMER, *Beiträge zur materialistischen Kulturtheorie*. Köln 1978.; また次の諸書物を参照, Ina-Maria GREVERUS, *Einführung in Fragen der Kultur- und Sozialanthropologie*. (Kultur und Alltagswelt. München 1978); 筆者を含む次の文献を参照, Hermann BAUSINGER, Utz JEGGLE, Gottfried KORFF, Martin SCHARFE, *Grundzüge der Volkskunde*. Darmstadt 1978.; さらに次のリールの見直しのディスカッションを参照, Hans MOSER, *Wilhelm Heinrich Riehl und die Volkskunde*. In: *Jb.f.Volkskunde*, 2 (1979), S.73-102. このハンス・モーザーの論考の他に同号には次の諸士が見解を載せているのを参照, Wolfgang BRÜCKNER, Klaus GUTH, Helge GERNDT, Günter WIEGELMANN; [訳者補記]ブリュックナーの主宰する。

10) この領域では研究はずっと散発的でばらばらであったが、今ようやく、ある種のまとまりをもつような動きを見せている。これについては、《民俗学からみた労働者研究》に関する次の報告を参照, In: *Zs.f.Vk.* 75 (1979), S.259-285.; またドイツ民俗学会の活動として企劃された「労働者文化」に関する研究会の第一回発表会の案内を参照, *Dgv-Information*, 88 (1979), S.74f.

11) 民俗学の分野からの重要な研究の面から代表させてよいものとして次を参照, Dieter KRAMER, *Freizeit und Reproduktion der Arbeitskraft*. Köln 1975.

12) 参照, Hermann BAUSINGER, Elfriede MOSER-RATH (Hg.), *Direkte Kommunikation und Massenkommunikation*. Tübingen 1976.

13) 参照, Albrecht LEHMANN, *Das Leben in einem Arbeiterdorf. Eine empirische Untersuchung über die Lebensverhältnisse von Arbeitern*. Stuttgart 1976.

14) 《ミュンヘン学派》([訳注] 歴史民俗学の代表者ハンス・モーザーとカール＝ジーギスムント・クラーマーを指す)の多数の研究のなかには、すでにカノンのな分類に束縛されずに、しかも文化史的に総合性をもつものがあらわれている。その端的な一例として次を参照, Hans MOSER, *Chronik von Kiefersfeldern*. Kiefersfelden 1959.; Karl-Sigismund KRAMER, *Volksleben im Hochstift Bamberg und dem Fürstentum Coburg*. Würzburg 1967.; また最近の成果として特筆すべきものとしてウッツ・イエグレ

他面では、批判の対象となり表舞台からは御用済みとなった《カノン（基準項目表）》が折にふれて頭をもたげるのがみとめられる<sup>15)</sup>。これは一部では機械的な惰性かも知れず、あるいは反動であるのかも知れない。いずれにせよ、もう少し問いを重ねるのがよさそうである。カノンの抵抗力は、たといカノンそのものは理論としてはもはやともに機能しないとしても<sup>16)</sup>、民俗学者にとっては帰属の場を供していることにあると言えそうである。すでに問題となっていた民俗学にとってのアイデンティティの難しさは、社会科学に向かうことで解消されはしない。社会科学の地平は、確かな立ち位置を保証するには広すぎるのである。

それゆえ、またもや定義問題までが勢いよく浮上する。フォルクスクンデ（民俗学）とは何か、という問いは解決されてはおらず、過去のものにもなってもいない。《フォルク（民）》の語を手掛かりに語源に遡れば解けるというものでもない。しかしこの数十年について言えば、論議の節目々々からも明らかなように、フォルクスクンデとは何かという問いは、狭隘な陣地をもとめて発せられているわけではなく、血統の純粋を追い求めているものでもない。民俗研究の特質をさぐるためのいわばアクセントなのである。

### 3. 問題点の整理

何か目覚めたような気分と高揚感のために民俗研究の特質を問うことが一部では却ってタブー視された。しかし批判的な社会科学への信頼が偏頗な陣地取りの犠牲になるのはいかがなものか。（〔訳者補記〕1970年前後の論議を）振り返って言えることだが、特質への問いが特定の免責テーゼ（〔訳注〕肝要なのは普遍的な問いであり個別問題は不要）によって押しつけられたのだった。もっともそれらのテーゼが挙げて誤りというわけではないが、そこにはある種の排除の力がまじっていた。特質の不問に行き着いた論議から三つを取り上げよう。

1. 理論をめぐって繰り広げられた1970年前後の論議では、**問題**という概念（〔訳注〕問いを立てること自体）が本質的な役割を果たした<sup>17)</sup>。それは研究の空白部分を指しているの

の研究を参照, Utz JEGGLE, *Kiebingen – eine Heimatgeschichte*. Tübingen 1977.

15) 参照, Martin SCHARFFE, *Kritik des Kanons*. In: Abschied vom Volksleben, S.74-84.

同上, S.84, passim.

16) 同上, S.84, passim.

17) たとえば次を参照, H. BAUSINGER, *Kritik der Tradition* (前掲注3), S.236.; また特に先に挙げた論集『＜民のいとなみ＞からの決別』(前掲注1, S.9f.)における基本的な要請を参照。同書の索引では、問題(Problem)は、経験(型調査研究)(Empirie)、イデオロギー(Ideologie)、方法(Methode)、民(フォルク Volk)と並んで最もよく取り上げられる項目である。

ではなく、研究活動、延いては学問はリアルな問題を直視すべし、との要請であった。ところがこの要請は、専門の区分を問うことを免れさせるもののように受けとめられた。<sup>\*</sup>グンナー・ミュルダールに一致することになるが、たしかにリアルな現実には、《経済学の問題や社会学の問題や心理学の問題があるのではなく、決まって複合な問題しかあり得ない》<sup>18)</sup>。

しかしこのテーゼは、それ自体、ある種の相対化をもとめている。問題（の措定）は常に感受（Perzeption）すなわち知覚（Erkenntnis）のカテゴリーである。したがって事実（Fakten）の相関ではなく、事実をめぐる思考の相関を指している。<sup>\*</sup>マックス・ウェーバーが強調したもの正にこの意味においてであった<sup>19)</sup>。

学問の作業領域の根底にあるのは、《ものごと》をめぐる即物的な相関ではなく、問題にかかわる思考の相関である。

しかしミュルダールの発言をそのまま受け取るとしても、今の問いへの回答としては完全ではあり得ない。問題を指定する様々な経路については何も語っていないからである。

はたしてフォルクスウンデは、あらゆるリアルな問題の解決に一臂の力を貸すことができるであろうか。明らかに、否である。たしかにカノンが解消したお陰で、今日、作用域はかなり広がっている<sup>20)</sup>。しかし、フォルクスウンデがほとんど用をなさない問題もあれば、大いに発言できる問題もある。また、事実としてあらゆる問題に民俗学が多少関与できるとしても、**民俗学的に扱う**とは何を意味するのだろうか。

2. 同じことは、**学際的な聯繫**という（これまた原理的には正しい）要請にもあてはまる。土台にあるのは、必然的なことだが、多数のリアルな問題が（ミュルダールによって強調された）複合性である。具体的な経験型の調査は、民俗学徒を他の学問ディシプリンとの共同へと必然的に導いてゆく。個々の場所では、研究の指針が、固定した研究所や研究部門の解散と、フレキシブルな研究グループ・研究者組織の組み替えに進むこともある<sup>21)</sup>。

18) Karl Gunnar MYRDAL, *Objektivität in den Sozialwissenschaften*. Frankfurt(M) 1971, S.15.

19) Max WEBER, *Die „Objektivität“ sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis* (1904). In: *Methodologische Schriften*. Frankfurt(M) 1968, S.1-64, hier S.20.

20) 筆者が《癌》について、民俗学者が未着手のリアルな問題圏の見紛いような事例として挙げたのは、まだ5年か6年前のことである。次いで1976/77年には、癌をめぐる心理的・社会的側面に関する学際的な研究会に参加した。それから程なく、この問題に関するきわめて有意義な民俗研究として次の「日常意識のなかでの癌の観念をめぐる調査」がまとめられた。Jutta DORNHEIM, *Untersuchungen zur Krebsvorstellungen im Alltagsbewußtsein*. Mschr. Magisterarbeit Tübingen 1979.

21) 少なくとも原理としては、マールブルク大学の社会科学の分野については行なわれており、また行われていた。もっとも、新しく設けられた研究分野は最近も《無断設立》(Versäulungen) とされている

しかしそうした共同作業も、専門分野それぞれの特質を問うことを押し退けるとは限らない。むしろ、そこが焦点になることもある。なぜなら、そうした作業グループのなかでは、ある専門分野の代表者が他の専門分野の代表者を超えるような特定の寄与をなすからである。専門分野としての民俗学も、民俗性を帯びた具体的な作業になると、特にその得意領域では縄張りをまもることに汲々とせずともこなすことができた。たとえば民俗学からのメルヒェン研究の独自性がそうであり、そこでは、文藝史・教育学・心理学などのパースペクティヴも、フォルクスクンデの下でまとめられてきた<sup>22)</sup>。しかしそれ以外では、専門分野らしい独自の寄与とは何かが常に問われてきた。もとより問いは、研究者グループの再構成に際してのこともあれば、研究の進め方における区分における留意点のこともあるなど区々であった。

3. 定義への問いを背後に押しやるにはびつりの三つ目のキーワードがある。ディスクールすなわち認識関心や研究目的に関する合理的なディスカッションへの要請である。目的設定や内容と方法が共通の話題にされる以上、専門分野の特質をことさらなぞるまでもないということになる。

事態を明らかにするために、フォルクスクンデの多くの隣接学の一つをとり上げてもよい。伝統的に隣り合ってきたゲルマニスティク、殊にその一部としての文藝学である。もっとも、この20年間にあっても、内容をめぐる危機が尾を引いている。持ち伝えられたカノンへの不満はカノンの見直し（すなわち主要な項目の入れ替え）へ延びていっただけではない。カノンそのものを碎いて文藝という概念を拡大することへも進んだ。すなわち、あらゆる段階の娯楽文藝のすべての段階を組み込むだけでなく、ビジネス・テキスト（〔訳注〕キャッチコピーなど）をも含むことになった。しかしこの拡張の赴くところ、《識知価値の理論》への問いがいよいよ決定的となった。たとえば\*ノルベルト・メクレンブルクと\*ハロ・ミュラーの基本的な研究では、その問いに一章が当てられた<sup>23)</sup>。二人の著者は、《識知価値への問いに答えるのに役立つ》三つの異なったモデルを立てた<sup>24)</sup>。そして、所与のイデオロギー的な価値前提から答えを割り出す《ドグマ性》を否定した。また個々人の恣意（たとえば個人的な好み）の識知価値に決定を委ねる《判決》をも斥けた。著者たち

面もある。

22) 参照, Helmut BRACKERT (Hg.), *Und wenn sie nicht gestorben sind .... Märchen im Spiegel heutigen Bewußtseins*. Frankfurt (M) 1980. この論集の中では、グリム・メルヒェンの個々の話をめぐる民俗学的な解釈という課題の解決はきわめて不十分である。これには、民俗学的と言ってもよい質問に対しては大きく反撥するようなテキストであったことが関係してしている。

23) Norbert MECKLENBURG, Harro MÜLLER, *Erkenntnisinteresse und Literaturwissenschaft*. Stuttgart / Berlin / Köln / Mainz 1974, S.90-97.

24) 同上, S.96.

が選んだのは《弁証法的》モデルで、これは、学問におけるその都度その都度の対象の決定をも《理性的な検討の対象にすること、つまりディススクールに組み込むこと》に他ならない。言い換えれば、何が知るに値するかについても、教える者と学ぶ者のあいだの能う限りシンメトリーなディスカッションという仲立ちを経るべき、と説くのである。

かかる手続きが理性的であることは言うまでもないだろう。たといドグマ的な動きがディススクールのなかでも消失しないとしても、また非合理的な体質がディススクールを幾らか動かすことが幾分できるとしても、何が知るに値するものであるかを決定することを開かれたディスカッションから奪うとまでは言えない。しかし以上を指摘したからとて、なお決定を見出す上での形体的すなわち教育学的な経路を取り上げたにすぎない。核心部では、決定は、内容に関わる原理をも必要とする。言い換えると、ディススクールを重視することは、信頼するに足る方向付けのデータのための営為やデータの選択をめぐる基準を余計なものにするわけではない。これらの基準は、ディススクールのなかで確かめられるか、あるいは少なくとも検証される。指針の枠組みも、ディススクールのなかで作られるか、あるいは少なくとも修正され得、また作られるか修正されるべきである。これは、データの選択は無から生じるとか、選択されたデータはそのときどきの研究に関わる事象にとって意義があるにすぎない、との意味ではない。特質への問いは常に新たに立てられる。つまりディススクールには付きものだが、ディススクールの可能性を挙げるだけではポジティブに為し果すことにはならず、逆に余計であることをも意味しない。

#### 4. 民俗学の独自性

ここで民俗研究の特質を問い、それを型にしてみるなら、たとえば細分化して厳格なシステムを目指すのではないことが明らかになるだろう。たしかに、学問諸分野を一つのシステムに組むことはできるだろう。しかし、おおまかな見方ではあるが、交錯なしには体系は後退する。逆に細かな見方では、特定の学問の構成的な位置を正確に特定することが屢々不可能になる。この点で\*カール・R・ポパーが強調したように、《いわゆる学問の専門分野》は《諸問題と解決への試みの区分と構成をもったコングロマリット以外ではない》<sup>25)</sup>。しかしこの相対化には、そもそも《専門》を口にすることをめぐって、官僚主義的・機構的な着地を越えるポジティブな説明が含まれる。いずれの専門にも、指針の枠があり、進め方の特質があり、それは、専門分野の歴史的展開や、伝統と経験に根をもっている。

25) Karl R. POPPER, *Die Logik der Sozialwissenschaften*. In: Theodor W. ADORNO u.a., *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie*. Neuwied und Berlin 1969, S.103-123, hier S.108. In: *Abschied vom Volksleben*, S.9f.

そこには、特定の対象と対象領域も加わる。これらは、専門分野に独占的に取り置かれるとまでは言えないにせよ、一定の比重をもってその専門分野に《リザーヴ》される。学問は、特定の対象領域との関わりにおいて成り立ち、自立したものとなることが多い。これは近年の動向からもうかがえる。《スポーツ研究》という特殊領域が分立したこともそうである。と共に、遥か昔に確立された文藝研究のような学問のディシプリンにもそれが見とめられる。もちろん、\*ハイネの『ドイツ・冬物語』が歴史家の視点から19世紀の出来事のキーワードの手引きに置き換えられることもあり得よう。同じく\*ギュンター・グラスの『ひらめ』は、民俗学の立場からは、口頭伝承としてのメルヒェンと書記のメルヒェンの並行例として見ることも可能である<sup>26)</sup>。しかし基本的には、これらの作品は文藝学の正統的な研究対象である。

それに対して民俗学の場合、何がその《独自性》なのかは漠然としており、まともな裏書も欠いている。しかしそうは言っても、ここにも明らかな標識らしきものがないわけではない。カノン（〔訳注〕古典的な規準）と決別した民俗学者たちだが、近年もなお、他の諸分野の代表たちとの接触のなかでそれを思い知らされることがある。したがって苦い経験でもある。筆者の場合で言えば、夏季休暇を終えた同僚がやって来て土産話をするところがある。休暇先で筆者を思い出さないわけにはゆかなかったと言うのである。話の中身は、古い衣装で教会堂へお参りをする女性たちを目にしたとか、その土地の《民藝》の証拠と称する怪しげな代物についてである。そうした整理の仕方は、部分的には位相のずれでもある。つまり、何かしら変わった様相を学問が把握するには、ある種の遅れが付きものという意味においてである。しかし同時に、一概には排除できない整理の仕方としての分かりやすさも関係しているだろう。（図書館の構成や博物館の展示をはじめ、対象を相手取る種類の）学問伝統からまったく身を振りほどくことができない以上、これらの対象分野を飛び越してすすむことはできない。

注目すべきは、近年、《カノンをもう一度組み入れよう》とする要請が起きていることである<sup>27)</sup>。そこで考えられたのは、第一には、《カノンのな》諸対象が中心的な価値を保っていた民俗文化の歴史的位相である。しかし現今の諸相と照らし合わせても明らかだが、たとえば《フォークロリズム》というレッテル付けでは、そうした諸対象の意味喪失を明らかにならしめるには不足があり、現今の文化のなかでの諸対象の機能の克明な分析にも十分ではない。\*フォークロリズムという事象ならびに諸事象は、より厳密な調査を常にも

26) 参照, Heinz RÖLLEKE, *Der wahre Butt*, Düsseldorf, Köln 1878.

27) Konrad KÖSTLIN, *Feudale Identität und dogmatisierte Volkskultur*. In: Zs.f.Vk. 73 (1977), S.216-233, hier S.231.; またを参照, Wolfgang BRÜCKNER, *Volkskunde im Rahmen von „Kulturanalyse und Berufspraxis“*. In: Bayerische Blätter für Volkskunde, 4 (1977), S.171-181, hier S.175.

とめるのである<sup>28)</sup>。

## 5. 文化の総体

このフォークロリズムからもすでに読みとれようが、決して何もかもひっくり返して逆転させようというわけではない。昔ながらの対象に逆方向のブラシをかけること<sup>29)</sup>、すなわち伝統的な対象領域のなかで新たな問いかけを繰り広げることもできるのである。一例を挙げると、語り物研究がそうで、そこでは新しい問いを基本的にはコンテキストのキーワードの下でまとめることができる。このキーワードは、狭めて固定することに概して抗うところがある。すなわち、先ずはテキストの相関が考えられており、次いで語られたことからの状況が射程に入る。後者は、それはそれで社会的な構図にかかわってゆく。そして最終的に、ある種の語る行為は文化の全体状況からも解釈することができ、また解釈されるのでなければならない。それは、文化の全体的な構図へのインデックスとしてである。

筆者はここで、《文化の》全体的な構図という言い方を意識的におこなっている。一般論としてだが、民俗学にとって構成的であるような総合性をもつキーワードがあるとすれば、それは文化(Kultur)であろう。もっとも、社会的な構図は筆者も論じてきた。その点で言えば、社会的なものと文化的なものとの関係について、前者にのみ具体的な現実局面を、後者にのみグローバルな枠組みを見ようとするのは、両者の関係を誤って捉えることになるだろう。事實は、把握がすこぶる難しく(シンプルな意味論的手続きでは解き得ない)補完的關係である。社会(Gesellschaft)は、文化の枠組みのなかで現実となり、文化の方もそれが構築と定着に至るにはゲゼルシャフトの局面であることを必要とする。カルチャーとゲゼルシャフトをシステムティックに分けたのは\*タルコット・パーソンズであったが、その場合も、《いずれの社会も文化をふくみ、また文化である》との前提においてであることが強調された<sup>30)</sup>。テュービンゲン・スタディープランでは、文化は社会の《別

28) ここでは次の論説を挙げれば十分だろう。参照, Utz JEGGLE / Gottfried KORFF, *Zur Entwicklung des Zillertaler Regionalcharakters*. In: Zs.f.Vk., 70 (1974), S.39-57. またドイツ民俗学会の大会(於キール 1979)でのコルフの発表(Gottfried KORFF, *Regionalismus und Folklorismus*)に続くディスカッションがある(⇒原注 64 への訳者補記)。

29) 次の論考の中に《フォークロアは別の道に分け入った: 新たなパースペクティヴ》の一節があることを参照, Martin SCHARFE, *Towards a cultural history: notes on contemporary Volkskunde (folklore) in German-speaking countries*. In: Social History, 4 (1979), pp. 333-343. 民俗学への評価としてシャルフェがこれを1970年代になって初めて導入したのではない。すでにインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンが次の研究においてこれを語っていたのである。Ingeborg WEBER-KELLERMANN, *Erntebrauch in der ländlichen Arbeitswelt des 19. Jahrhunderts*. Marburg 1965.

30) Wolfgang LIPP / Friedrich H. TENBRUCK, *Zum Neubeginn der Kulturosoziologie*. In: Kölner Zs.f.Soziol. u. Sozialpsychol. 31 (1979), S.393-398, hier S.393.

の面》である、との表現になったのは適切かつ周到であった<sup>31)</sup>。

別の面、これが特に指すのは、あらゆる社会的行為（それには歴史的次元が同時にかかわっている）の対象化された推移、ならびに実情と伝統である。これは、またそこには広義の文化概念がひそんでいるということもでき、その点では、ここでもまた\*ヴィルヘルム・ハイน์リヒ・リールを引用してもよい。その『ドイツ人の仕事』の一文である<sup>32)</sup>。

文化という言い方で私たちが理解しているのは、仕事の成果の総体であり、殊にそれが個々人の人格あるいは民の人格のシグナルとなっていることである。

この包括的な意味における文化（カルチャー）は、\*ネルソン・ブルックスの言う《生き方のパタン（patterns for living）》に近づくという言い方もできるだろう。すなわち、次のように敷衍されるところのものである<sup>33)</sup>。

生を営むシチュエーションの果てしなき万華鏡の諸相のなかでの個体の役割（Rolle）、場を定めるための諸々の規範と見本、そしてそのなかでの姿勢の取り方。

この説明には、役割の概念がすでに示すように、社会的な事実関係が含まれている。しかし視野を限った\*関係性社会学の諸々のカテゴリーでは、この生き方のパタンは充分には把握できない。

言い換えれば、ここで大事なのはドグマ的な陣構えなどではない。それどころか、専門分野に垣根をめぐらせるべきでないだろう。最近、社会学がエネルギーに戦いを挑んでいるのも、《文化という快い概念にまとめられるあらゆる事実を抹消するまでになる還元主義的な社会理解》に対してである<sup>34)</sup>。『ケルン社会学・社会心理学誌』の最新号は文化社会学の特集にあてられたのである<sup>35)</sup>。その際、もし民俗学にまったく触れないとか交差

31) 参照, *Studienplan für das Fach Empirische Kulturwissenschaft* (Universität Tübingen), 1973, S.2.

32) Wilhelm Heinrich RIEHL, *Die deutsche Arbeit*, Stuttgart 1861, S.313.

33) Nelson BROOKS, *Teaching culture in the foreign language classroom*. In: *Foreign Language Annals*, 1 (1968), S.204-217, hier S.210. 但し次の文献からの重引, H. Ned SEELYE, *Analyse und Unterrichten des interkulturellen Kontexts*. In: Horst WEBER (Hg.), *Landeskunde im Fremdsprachenunterricht*. München 1976, S.9-49, hier S.11. この説明があるからとて、文化を個人に帰着させて解するためのプロパガンダではないことは、ことさら言うまでもないだろう。しかしまた、《多数者の文化》においても、個体的・主観的な次元を軽視しないことがもとめられる。

34) LIPP / TENBRUCK (前掲注 30), S.394.

35) *Kölner Zs.f.Soziol. u. Sozialpsychol.* 31[Heft 3] (1979): 文化社会学の特集とする分冊 3 はリップとテンブルックによって企画された (前掲注 30)。

せずにおわっていたなら、奇妙なことになっていただろう<sup>36)</sup>。同様の動きは歴史家の間でもみられ、最近では、文化的な実態への注目の度合いが高まっている。たとえば\*ゲルハルト・A・リッターが編んだ『労働者文化』を思い浮かべてもよい。そこでは、階層に照応する伝統と価値コードが強調され、またそれがその時々の生活様態 (Lebensweise) との相関のなかに位置づけられる<sup>37)</sup>。ここでも民俗研究が組み込まれていると共に、民俗研究の可能性が先取りされている面すらみとめられる。

しかしこれを確かめたからとて、それが意味をもつのは、民俗学的というレッテルによって何か特殊なものに焦点があてられるときだけである。大事なのは、具体的な事例に即したより克明なスケッチであろう。

## 6. ニューファンドランド島の絨毯にちなんで

一例を挙げると、アメリカ合衆国の中心的な民俗学誌の最新号に、ニューファンドランド島の鉤編み毛布に関する\*ジェラルド・L・ポツィウスの論考が載っている<sup>38)</sup>。これを選んだのは、任意の、しかし深刻過ぎない事例だからである。しかし「デザインに見る社会構造の代表例」というサブタイトルから期待されるのは、美的生産と社会構造との興味深い交差であり、目下の設問には意義のあるものとなるだろう。

論者は《マット》の製作工程をなぞり、さらに二種類のデザイン類型の区分を集中的に取り上げる。ニューファンドランド島の女性たちは、規則的な幾何学文様を選ぶことによって《コミュニティ》の伝承的な美の規範に沿うか、それとも《イノヴェーション》、すなわち伝統には存在しない紋様を決断するか、どちらかである。そこにイノヴェーションが潜在していることは過大評価すべきではない。女性たちが、他のテキスタイルの紋様に立ち返ることも珍しくないからである。彼女たちは自分が実際に見た経験を伝えるときには、必ずしも成功例を中心に考えてはいない<sup>39)</sup>。たとえば、収集者の女性は、毛布の一枚に描かれているのは《噴水と烏賊の触手》と思い込んだが、実際には作り手は、じゃれている子猫を写した下図をつくって仕上げた、という報告があったりする。しかしそれは特に幾何学文様ではないタイプの場合である。ポツィウスの観察によれば、二種類のタイプながら、それぞれに多様性が根付いている。シンメトリックな幾何学文様のマットは、ほ

36) 実際には少なくとも一人の民俗研究者が文化社会学のコロキウムに参加した。それには次の報告を参照, Wolfgang BRÜCKNER, *Volksfrömmigkeit – Aspekte religiöser Kultur*. (前掲注 30), S.559-569.

37) Gerhard A. RITTER (Hg.), *Arbeiterkultur*: Königstein 1979.

38) Gerald L. POCIUS, *Hooked Rugs in Newfoundland: The Representation of Social Structure in Design*. In: *Journal of American Folklore*, 92 [No.365] (1979), pp.273-284.

39) [訳者補記] 具体例として原文では脚注となっている報告を本文に組み込んだ。

とんどもっぱら厨房にもちいられ、他方、個性的な紋様は大きな前室に敷かれる。この違いの重みは、その前室（front room）が、訳してみると《綺麗な居間》を意味する呼ばれ方であることから明らかになる。祭りの日でも、営みは厨房に所狭しという形でおこなわれ、居間はめったに来てもらえない賓客、具体的には牧師や商人への応接のためにとっておかれる。これらの客の訪れには、やはり個性的につくられた絨毯がもちいられる。普段は、それらの大事な個所には防水布で被せて保護しておくのである。

ポツィウスは、そうした観察を、\*ジョン・L・フィッシャーが指定したテーゼと組み合わせた。後者は、さまざまな文化の藝術生産の調査にもとづいて、平等な社会の藝術様式は単純でシンメトリックな要素を特徴とするに対して、ヒエラルヒー社会では非反復的・非シンメトリーに傾くとの見解に予て到達していた<sup>40)</sup>。たしかに、ニューファンドランド島の女性たちの絨毯作りに二種類が同居している事実は、この理論と矛盾しない。むしろフィッシャーの理論の起点と合致する。と言うのは、文化が表現される局面における重要な決定因子は《社会的なファンタジー》とされるからである<sup>41)</sup>。この社会的ファンタジーが二つの異なった方向へ延びて、異なった社会的シチュエーションに正統性を付与するとされる。しかし、《シンプル度が強い》諸文化でも、（統計的な重みの所在によってどちらか一方であることが確かめられた）そのテーゼが、複合的な諸文化にも当てはまるかどうかは問われてよい。またポツィウスがこの一般論的な仮説に依拠して解決を図るだけの適切な知見を有していたかどうかという問題も残る。

いずれにせよこの観察が関心を惹くのは、美的活動と社会的コミュニケーション形式というまったく違った規定をされる二者を結び付けているからである。もとより、それに注目することによって、そうした文化研究としての観察と認識の機能が（絨毯に焦点があてられたこともあり）図柄的なものに矮小化されてはいないかとの異論が起きるのはもっともである。交流の諸形式も、社会的な障壁も、普段の人付き合いのなかでヒエラルヒーが尊ばれることも、どれも昔からよく知られてはいた。実際、民俗研究者の作業は、多かれ少なかれ親しんでいるイメージをなぞっているにすぎないとも言える。しかし民俗研究者は、社会学的な輪郭線の入ったお絵かきの本をあたえられた子供のようなもので、自分でするのは色づけだけというのは本当だろうか。これには二つの答え方ができるだろう。先ず、社会的な構造が細部まで用意されているとしても、それが定着している様子や実際のサイズはどうなのを明きらかにするのは文化的な観察なのである。今の事例で言えば、ソファを保護している防水布がめくられるのは誰が来たときで、またどんな状況においてな

40) John L. FISCHER, *Art styles as Cultural Cognitive Maps*. In: *American Anthropologist*, 64 (1961), pp.79-93.

41) 同上, p.79f.

のかを明らかにすることによって、輪郭線を絵の具で塗ってゆく以上に、社会的ヒエラルヒーの意味を克明に知る可能性を得、役立たずとして片づけられるものではなくなるだろう。しかし二つ目の答え方がある。それによって、文化と社会との緊密な補完関係が思い起こされ、それは、どちらが優先するかとの言い合いに疑問符をつきつけるだろう。つまり文化的事象の上に社会的ヒエラルヒーが浮かび上がり、くっきりした輪郭を見せるのである。《防水布》は言葉でもあり得、衣装には差異があり、付き合いの形式のなかには特別のシグナルがある、等々である。もとより、社会的差異を表出もすれば常に新しく作りもするのは、形式と規範の絡み合いである。ここで言う社会的差異には当然ながらエスニックなものが入ってくる。この点でもアメリカの例を引くなら、\*イヴォンヌ・R・ロックウッドの研究がある<sup>42)</sup>。それによるとサウナ風呂はフィンランド系アメリカ人には特別の(特別とは、構成的な手立てということになろうが)アイデンティティの表出である。

## 7. 外国人労働者問題における社会学と民俗学

民俗学の特徴がもっと明らかになるのは、同じ問題について社会学の課題と民俗学の課題を比較することによってであろう。一例だが、この数年、多数の民俗学者と各地の民俗学研究所は、外国人労働者の問題に取り組んできた。これが実際問題であることは言を俟たない。いわゆるガストアルバイター(外国人出稼ぎ労働者)は私たちの社会の権利薄き人々の最大グループである。しかも、労働者文化と呼ばれるテーマにもなおほとんど組み込まれていない。この問題の複合性は学際性の気配を帯びるところではなく、(予測命題が不可避だが、それを確かなものにするためにも)むしろ学際性は喫緊である。なぜなら、《確かな事実》なるものはなく、計測可能な諸事実ですら《諸事実によって検証されるべきはずの当の理論の光によって選択された事実である》ことがただちに判明する種類のテーマだからである<sup>43)</sup>。具体的に言おう。私が外国人労働者とその家族の住居問題を考察するとすれば、私の物の見方に影響するのは、これらの労働者たちが近い将来に故国へ帰るのか、それとも永久にここにとどまるのか、それを予めどう捉えているかであろう。現象的には同じ事態をどう捉えるかの違いが、すでに描写するだけの段階でも起きる。一方では《トランクにしゃがんでいる人たち》がおり、他方には(いったん収まっていたはずのエスノセントリズム!)《秩序を乱す連中》がいる、というように、納得の仕方には先入観が関係する。そしてその先入観は、他の学問分野において準備された先行知見に合致している

42) 参照, Yvonne R. LOCKWOOD, *The Sauna: An Expression of Finnish-American Identity*. In: *Western Folklore*, 36 (1977), pp.71-84.

43) Karl R. POPPER, *Das Elend des Historismus*. Tübingen 1969 (2.Aufl.), S.103f.[邦訳] カール・R・ポパー(著) 久野収・市井三郎(訳)『歴史主義の貧困』中央公論社 1961, p.167.

ことが少なくともとめられる。

しかしここでもまた、学際的な共同作業の枠組みのなかでの民俗学の独自の寄与とは何かが問われることになる。ちなみにバーデン＝ヴュルテムベルク州では1979年の晩秋に、外国人の若者を対象に質問調査がおこなわれた。彼らの《学業の向上や就業や生活水準や社会への溶け込みを促進するため》である<sup>44)</sup>。当該官庁の説明によれば、調査には、社会学系の教育学者たちによって作成された支援プログラムが添えられた。しかしアンケートには、(外国人の若者たちが)踏み込んだ決断をする土台になるようにとのもくろみが託されていた。さらに、社会学者たちの手になるアンケートは微に入り細にわたった。少なくとも123項目を数えたからである。また滞在期間に関する質問(貴女/方はいつからマンハイムに住んでいますか?)など僅かな項目を除くと、いずれもチェックを入れさえすればよい(言い換えれば入れねばならない)体裁だった。民俗研究者の立場からアンケートを見るなら、たしかに質問事項はいずれも基礎データとして重要だが、心に響く、と感じさせるものではなかった。それにあたるのは、むしろ余暇に関する二三の問いだが、これらは、スタンダードな質問&回答ゲームのなかでは弱い環であろう。あるいは住まいの部屋数もそうで、一つの質問が次の質問へと延びていって差異にふれることになるだろう。しかし考えて見ると、最初の質問がすでに多様な方向への転轍そのものなのである。**貴女/方どんなグループに加わっていますか?**という問いは、先ずは日常のコミュニケーションの形式を確かめており、したがってどんな種類の同輩集団かという多様な可能性に向けられている。しかし事実としては、この問いは職業の指標でもある。普通教育学校の生徒、全日制職業学校の生徒、職業教育中、職業教育を終えて就労中、職業教育を終了せずに就労中、現在は無職 — 問われる若者がそのいずれであるかを質すからである。

文化を主とする設問は、このカタログが終わって(もちろんその結果が土台になるが)ようやく始まる。当然ながら、何よりもフォークロアが考えられているわけではない。とは言え、外国人労働者の間での(部分的には潜在的、部分的にはデモンストレーション的な)フォークロアの役割を調査するのは興味深い。そうした調査は、フォークロリズム問題([訳注]新しい環境下での民俗的要素の変容)に新しい真剣味のある色合いをあたえることになるだろう。そこで、この質問地帯を拡大したなかで特質を探ろうと思う。また質問を規定している新しいパースペクティブを実行する中で特質を探ろうと思う。

シュトゥットガルトの州省庁の質問表への回答から読み取れる現実の困難さとは何かを考えるとただちに判明するように、特定の人々の特質とは言えないような困難がほとんど

44) バーデン＝ヴュルテムベルク州「労働・健康・社会秩序担当省」広報1979年9月19日付。

のように思われる。ドイツの若者の間でも、同じような結果になるだろう。違いは、外国人労働者ほど塊にはなっていないことくらいである。いずれにせよ差異は先ずはグラデーションを呈しており、したがって量的である。そして、その困難がどこから来るのかという問いを加えることによって、はじめて質的な違いへの道が通じる。少なくとも部分的には、出自や文化的故土と直接結びついた特殊な困難さが根底にあると考えてよい。しかしこれは、質問がなされたのとは別の分野の方が、より明瞭、より直接的に把握できる可能性が非常に高い。外国人の若者たちは（一般的に外国人の流入民は総じてそうだが）、ドイツの若者とは原理的に異なった価値指針を示すような価値システムを身につけている。身体にしみついた宗教性の勝った教育や、たたきこまれたモラルコードは他の規準との軋轢に発展しかねない。そうした軋轢は直接かかわる暮らしの場にとどまらず、間接的には存在全体にまで影響を与え、さらに周囲をも巻き込んで衝突になったりする。ここで齟齬として分類されるものは、関係者自身にとっては核心的で容易に相対化し得ない価値規範であることが屢々である。

私たちには異質な価値観を総じて視野に組み込む可能性は、部分的には文化の概念と関係する。文化の概念は、少なくとも社会と向き合うなかではそう解され、それゆえ文化は、それぞれの独自性に目を開かせる。先進工業国への移入によって、外国人労働者も同じような社会的な枠で活動することになる。すなわち後期資本主義の進歩した工業社会ないしは\*サーヴィスエコノミー社会である。言うことは、外国人労働者もこの枠のなかで判断され勝ちである。問題のアンケートは、基本的には、その意味がこの座標システムに関聯づけられるようなデータであることが目指されている。片や外国人は彼らの文化のなかであって、彼らが現在暮らしている環境を侵されてはおらず、いわば部分的な自治の状態にある。彼らは、自分たちの言葉を持ち、自分たちの伝承を失わず、自分たちの独自の暮らし方を保っている。

文化（Kultur）と社会（Gesellschaft）という抽象表現の下で把捉された差異は、概念化された条項あるいは概念化された読み替えによって中和されてしまう恐れがある。たとえば外国人の集団を部分社会と呼ぶこともできないわけではない。しかし抵抗は、サブカルチャーという言い方をするときよりも大きい、と筆者には思われる。多数性の許容を容易に内包するすることでは《文化》がはるか勝っており<sup>45)</sup>、それどころか文化は差異に力点を置くことすらある。それに対して社会の概念が向かうのは、より多く《接収》である。かく、エスノセントリズムと闘うには（差異を許容する）文化を経路とする方が優れている。

45) これについては次を参照, Wolfgang LIPP, *Kulturtypen, kulturelle Symbole, Handlungswelt. Zur Pluralität von Kultur*. In: Kölner Zs.f.Soziol. u. Sozialpsychol, 31(1979), S.450-484.

早い話、外国（これがどこであれ）からの流入民を彼らの文化に沿って理解しようとするなら、自己文化の尺度を当てただけでは端から無理がある。

## 8. 価値規範の重み

これが重要なのは、上に挙げた《価値規範》は決して止揚された上部構造現象にのみ関わるわけではないからである。それは、宗教的な観念やタブーから、日常の思考や行動のあまり目立たないながらも馴染みのない様相にまで及ぶ。原初的なジェスチャーにおいてすら多様な意味をそれに託すことが活発におこなわれる。見本としては、肯定と否定をあらわす当地（[訳注] ドイツ語圏）のノンヴァーバル・ジェスチャーが南ヨーロッパでは概して逆の意味になることを挙げてよい<sup>46)</sup>。しかし残念ながら、差異は常に明瞭というわけでもなく、簡単に固定して捉えることもできない。それに照応してと言うべきか、解釈は混迷し、心理的・社会的な疎隔は恒常化するか<sup>47)</sup>、あるいは特定のシチュエーションにあっては誤った物差しで測られる、といった危険が大きくなり勝ちである。

この点で一例を挙げると<sup>48)</sup>、1979年の秋にテュービンゲンで起きた婦女への障害事件があるが、それは文字通り一步一步破局へと発展したのだった。事件の始まりは、17歳の少女が人気のない自転車道で南イタリア出身の男に空気入れを貸してくれと言われたことだった。少女は怖くなり、それゆえそのイタリア人とかなり時間をかけて言葉を交わした。男と距離を保つためだった。《そう、それでよいのよ》、少女は対話でそう言った。ドイツの尺度ではその場合の適切な振る舞いだった。が、正にこれによって、彼女はイタリア人により近い接触へのシグナルを送ってしまった。— これからも窺えるように、行為が最終的に錨を下ろしている価値システムを認識することは重要である。さらにこの課題は、日常のあり方における元素的な形式<sup>49)</sup>の理解へと拡大される。— なおこの《元素的》という概念を挙げるのは、いわゆる直接性への信奉を助長せんがためではない。外国人流入者のふるまい方も（またそれだからこそ）、たどりついた国の文化との接触によって挫折させられる。そこでは人々の生き方は、普遍性を得た科学技術による媒体のなせるところとして進歩の《領分にされてしまっている》からである。— それは、おおまかに区分し

46) 参照, Arnold NIEDERER, *Zur Ethnographie und Soziographie nichtverbaler Dimensionen der Kommunikation*. In: Zs.f.Vk., 71 (1975), S.1-20, hier S.5.

47) 《世界についての意味解釈がもはや一義的ではなくなるとき、フラストレーション、疎隔 (Entfremdung)、不安定などが頭をもたげる》。これについては次を参照, Dieter WENKO, *Wertung und Wissenschaft. Gedanken zum Gebrauch des Begriffs Entfremdung*. In: Kölner Zs.f.Soziol. u. Sozialpsychol., 27(1975), S.33-46, hier S.44.

48) [訳者補記] 原文では脚注となっている事件の記述を本文に組み込んだ。

49) [訳者補記] 原文では脚注となっている《元素的 (elementar)》の概念の説明を本文に組み込んだ。

たときの余暇だけのことではない。一日の流れもそうであり、それどころか時間の使い方の全体にわたっている。コミュニケーション行動の枝別れもそうである。挨拶を交わす程度から親密な身ごなしに至る交際の形式もそうである。異性との関係や世代間の距離もそうである。住宅の部屋数を把握したりそれを住民の数で割ったりしてすむことではない。包括的な意味での住み方を問うのであり、同じく広義での食や飲み物、また被服と《身体文化》である。

ここでは、この分野の設問の特質を一般的な形で明らかにすることを目指しているが、だからと言って、そうした研究がまだどこでも行なわれていないとの印象をあたえんとすれば、それは本意ではない。この局面の一部は、たとえば\*ルードルフ・ブラウン<sup>50)</sup>や\*ビリー・エーン<sup>51)</sup>、さらに\*ハリル・ナルマンの研究<sup>52)</sup>においてみとめられ、これらは文化研究の視点であることにおいて、数多い社会学における外国人出稼ぎ労働者とはポジティブな意味で一線を劃している。

これらの諸研究において明らかなが、特定の研究方法を選んだことが強調されており、それは民俗研究の特質に他ならない。ルードルフ・ブラウンは研究にあたってアンケート調査を取り入れたが、それは狭義の社会的データにとどまらず、物の見方と姿勢に関わるものだった。ハリル・ナルマンは、そうしたアンケートの諸項目をトルコ人への質問に取り入れた。それゆえ両者の研究は統計的な実態把握において充実している。

しかし両者の研究が充実しているのは、むしろインフォーマント一人一人が語るのを取り入れたからであった。もっとも、そこでの語りは、語られる中身が正確である点では、単なるアネクドートではない（〔訳注〕フィクションではない）。が、語り物に色と生命をあたえているのは（〔訳注〕実話であっても語りの形式は）アネクドートだからである。ビリー・エーンがスタンダードなアンケート調査を取って避けたのも、その故だったろう<sup>53)</sup>。

ユーゴスラヴィアのアーゼンから来た人々にはアンケート調査はまったく向かなかった。そのため、彼らの出身地のシドやラヴネやアーゼンに赴き、地元にはいつ彼らと生活をしながら観察を続けたのは意味のあることだった。

50) Rudolf BRAUN, *Soziokulturelle Probleme der Eingliederung italienischer Arbeitskräfte in der Schweiz*. Erlenbach-Zürich 1970.

51) Billy EHN, *Sötebrödet. En etnologisk skildring av jugoslaver i ett dalsländskt pappersbrukssamhälle*. Stockholm 1974.; また次を参照, Klara WERNER, *Ein grekisk invandrarorganisation*. In: Fataburen, 1977, pp.187-200.

52) Halil NARMAN, *Türkische Arbeiter in Münster. Ein Beitrag zum Problem der temporären Akkulturation (Turkish workers in Münster. A contribution on the problem of temporary acculturation)*. Münster, Cöppenrath, 1978.

53) Billy EHN, *Sötebrödet* (前掲注 51), p.16.

エーンが小振りな研究ながらも、生彩に富んだ《克明な》描写ができたのは、特に参与観察によってであった。すなわち、フィールドとした場所とそこの人々とかなり長期に実地に関わった成果である。ちなみに、民俗学を、伝統的なエスノロジーや民族学と結ぶのは、かつては《エトノス》(民族・民族性)に即した行き方であった。たしかにこれは、諸文化の複合にあっては物差しになり、あるいはレッテルをつける面からも大きな可能性をもった。またそれは必然的に学際的な調査研究でしかあり得なかった。事例で言えば、外国人労働者をめぐっては、それが一定の役割を果たした。しかし諸学を結びつけるのは、むしろ研究方法であろう。長期間にわたる密度の高い観察、すなわち統計的な数字の羅列によって負担が軽くなるわけでもないような方法こそが本質的な役割を果たすのである。この点では\*ラウリ・ホンコがこんなコメントをしていることを挙げおきたい<sup>54)</sup>。

エスノロジー＝フォークロア・リサーチを(他のどんな分野でもなく)カルチュラル・アンソロポロジーと合体させる上での決定的なファクターは、《フィールド》とのほかに人格的で長期のコンタクトだった。

付言すれば、《エスノロジー＝フォークロア・リサーチ》はフォルクスクンデ(民俗学)と置き換えることができ、片や《カルチュラル・アンソロポロジー(文化人類学)》は私たちの感覚ではエスノロジーに近いのである。

## 9. 《ソフトな》方法と《ハードな》方法

したがって概括的に言えば、それを特徴づけるのは《ソフトな》装置である。このソフトな(weich)が意味するのは弱さではなく、慎重と柔軟である。ただし、ソフトな方法論がその可能性を全面的に発揮できるのは、屢々、《ハードな》(hart) 諸々の方法によって得られた知見と結合する場合であることは、出稼ぎ労働者にちなんでふれた<sup>55)</sup>。両者の相関について概括的に言えば、ハードな装置による質問調査に対して、それが十分に活かない僅かな一部だけがソフトな方法の取り分というわけではない。これにちなんで、ごく最近『オーストリア民俗学誌』に載ったグラーツのある\*フェルアイン(クラブ・組合)に関する論説のなかに興味を惹く一節がある<sup>56)</sup>。その(詳しく名前を挙げるのは控えるが)

54) Lauri HONKO, *The Role of Fieldwork in Tradition Research*. In: *Ethnologia Scandinavica*, 1977, p.75-90, hier p.77.

55) 参照, Hermann BAUSINGER, *The Renaissance of Soft Methods: Being Ahead by Waiting?* In: *Folklore Forum*, 10 (1977), S.1-8.

56) Elisabeth KATSCHNIGH-FASCH, *Das Mitglied. Ein Sonderkapitel zur Untersuchung des Grazer Vereinswesens*. In: *Österreichische Zs.f.Vk.*, 82 (1979), S.176-183, hier S.179.

団体のある役員の葬儀の直後、論文の執筆者は、メンバーに対してその団体に入っているモチベーションを調査した。すると、42%が主な理由として挙げたのは、《すばらしい葬儀》をしてくれるから、というものだった。しかし執筆者は、もっとニュートラルな機会に同様の質問をおこなえば結果はかなり違っていたと思われる、と付け加えている。

しかし、独特の能力不足の故の控え目の向こうに、ソフトな方法には、ハードな方法とは一線を劃した領域がのこっている。これは、少なくとも一寸見には《精度が》低いとみえるかも知れない。克明に区切られたカテゴリーやデータの蓄積を提示することは不得手だからである。しかしまた、もう一度見ると、《ずっと正確で》、《ずっと現実在即している》ことが判明する。この点で思い出すのは、\*マルティーン・ヴァルザーが最近ある討論会で口にしたコメントである<sup>57)</sup>。何らかのことがらについて、それにあたってのモチベーションを厳密に明示することをもとめられると、どうなるだろうか。

理由というものは……理由に関係する現実よりも概して硬すぎるのです。

この一般的な懐疑、すなわち〔訳者補記〕諺に言う)《鋭どすぎると刃は欠ける》だが、正に質問調査の機微を言い得て妙である。少し補足である。ハードなデータはよくほめられるようにカテゴリーに即した明瞭な整理であるが、それがために却って比較の可能性ではネガティブな面を露呈する。つまりその駆使するところの隙の無い決め方は現実とはあっておらず、中間地帯や中間音をとらえそこなう危険をともなう。質問者にインフォーマントが回答するときの逡巡は、殊に書面でのアンケートとなると、ほとんど感じ取ることができない。明言してもよいほどの拒否ですら、押しのけられることが少なくない。《正確な》方法論が潜在的にねらっている目標とは、当該の事象の平均値について能う限り厳密な規定に到達することにある。が、これは、想定された中間値を優先させて幅広い周辺部を捨象するところへ進んでゆく。個々の(いずれもあいまいではない)観察を再話する代わりに、極端に言えば、中間値の物語をつくってしまう。事象を量的に把握するコンテキストがそこなわれるのはソフトな装置の欠陥だが、それ以上のリスクがここにはひそんでいる、とまとめてもよいだろう。

しかも共時的に考えられたコンテキストであり、それが、考察対象の居場所である社会集団や人付き合いの範囲との取り組みに向かう。加えて(これまた基本的な傾向と言ってよいが)、厳密でハードな質問調査が得させる平均像は(当該の調査対象の活きた聯関

57) ヴァルザー (Martin WALSER) がヘルシンキで 1979 年 10 月 1 日に自作の小説『心理ゲーム』(Seelenarbeit) の朗読を行ったときの発言。

のはずの) 通時的な聯繫には目もくれずに通り過ぎる。それがどうなるかは、一つのキーワードを突きつければ明白であろう。すなわち伝記であるが、社会科学の諸分野でも<sup>58)</sup> 民俗学でも<sup>59)</sup> その意義は強まっている。しかし同時に、決然たる歴史的な民俗研究についても、相反する方向の二種類の要求がなされることが夙に指摘されている。一つは、歴史的な現象については能う限り厳密で統計にもとづいた記述を要すること<sup>60)</sup>、もう一つは、伝記をも併せてかつて活きた存在の証左を明らかならしめるような原資料の扱いである<sup>61)</sup>。

## 10. 《ソフトな》方法に託された課題

最後に、ソフトな方法が実際の事例との取り組みにもたらす利点を簡単にまとめておきたい。実際の事例をめぐっては、民俗学のなかでは一ころ盛んに議論がされたが<sup>62)</sup>、その後ほぼ沙汰止みとなった観がある。なお、ここでソフトな手続きにある種のプラスがあるとするのは、先ずは意外であるかもしれない。《社会的行為》に役立つ《情報の先駆け》<sup>63)</sup>は開かれた量的データにおいてこそ、いよいよ明確に、また一層文句のつけようがないものとなるからである。加えて、社会科学諸分野の数量化の方法は、他でもなく実際の適用

58) 参照, Martin KOHLI (Hg), *Soziologie des Lebenslaufes*. Darmstadt, Neuwied 1978. この箇所では、特別の方法的な重点への注目は、民俗学を正確な計測によって他の社会科学諸分野と区切ることに適していないことが示される。また厳格な方法へのある種の不信は、社会学の一部でも頭をもたげているこれについては参照, BAUSINGER (前掲注 55); しかし社会学においても注目すべき歩みがみとめられる。すなわち、分析的方法をめぐる従来の欠陥を、多様性の捕捉によってバランスを図り、またそれを通じて《主観性 Subjektivität》や《志向 Intentionalität》や《自省 / 反芻 Reflexivität》といった諸次元を、厳密性を欠き解釈に比重を置く方法に付きものとして片づけてしまわない、といった動向であるが、これについては次を参照, Hartmut ESSER, *Methodische Konsequenzen gesellschaftlicher Differenzierung*. In: *Zs.f. Soziologie*, 8 (1979), S. 14-27, S. 24-26.

59) ドイツ民俗学会の次の大会のテーマに向けたゲッティンゲン大学の関係者からの提案を参照, *dgv-Informationen*, 88 (1979), S. 72. [訳者補記] ドイツ民俗学会の第 23 回大会は 1981 年にレーゲンスブルクにおいて《モノとの関わり: モノ使用の文化史》のテーマで開催され、その報告書はケストリーンとパウジンガーの編集によって刊行された。書誌データ: Konrad KÖSTLIN / Hermann BAUSINGER, (Hg.), *Umgang mit Sachen: zur Kulturgeschichte des Dinggebrauchs*; 23. *Deutscher Volkskunde-Kongress in Regensburg vom 6. - 11. Oktober 1981*. Regensburg 1983.; しかし既に、たとえば次のような個別研究がなされている。参照, Albrecht LEHMANN, *Erzählen eigener Erlebnisse im Alltag. Tatbestände, Situationen, Funktionen*. In: *Zs.f. Vvk.*, 74 (1978), S. 198-215.; Susanne RENFTLE, *Erzählte Arbeitererlebenserinnerungen und Arbeiterbewußtsein*. Mschr. Magisterarbeit Tübingen 1978.

60) 本号収録のロートの考察「歴史民俗学と数量化」を参照, Klaus ROTH (S. 37-57.); また次を参照, Horst NEISSER, *Statistik, eine Methode der Volkskunde*. In: *Abschied vom Volksleben* (前掲注 1), S. 105-123

61) 次を参照, Utz JEGGLE, *Kiebingen – eine Heimatgeschichte. Zum Prozeß der Zivilisation in einem schwäbischen Dorf*. Tübingen 1977.

62) 参照, Dieter KRAMER, *Wem nützt Volkskunde?* (前掲注 7);

63) Dieter KRAMER, *Probleme der gesellschaftlichen und beruflichen Praxis in der Kulturosoziologie und europäischen Ethnologie*. In: *Zs.f. Vvk.*, 67 (1971), S. 228-243, hier S. 240.

を見据えるなかで成り立った面もあるからである。それは世論調査という広大な領域を考えるだけでもあきらかであろう。とは言え、その適用を見ると、(常に操作的ではないにせよ) 調査対象の生きた場からも関心のあり方からも浮き上がってしまっている。

それに対してソフトな方法の活用は、研究者にとっては、研究者の関心と調査対象者の関心を(ぴったり重なるわけではないが)間違いなく接近させる<sup>64)</sup>。この凝縮は、あらゆる人間学の原理的な要請と言ってよい。少なくとも、貶められた階層や集団が研究対象となるあらゆる領域においてはそうである。もとより、その要請を現実のものとするのは困難だが、それは、多層的なフィールドにちなんだ学問諸分野による観察の複合を明瞭な動きに移しかえるのが容易ではないからである。調査される側から明白な関心が表明される場合でも、それが一義的であるとは限らず、それゆえ研究者がもつべき認識として《正しい》とも言い切れない。したがって、どの方向に向けて関心の舵を切るかは関係者との協議と論議を経てはじめて決着する。しかし筆者はまたそれが可能であるとも見ている。それは、統計的な方法もまた《対話的(弁証法的)》になり得るからであり、またある種の均衡を受け入れることができるからである。言い換えれば、研究の設計にあたって、特殊な関心と生存の場に配慮するなら、である。

もとより実践の問題性のすべてが如上の条件を分母として、その上に据えることができるわけではない。アクション優先の短絡という誤解に走るのも考えものである。研究の実際の側面は、直接に触れ得る状態への置き換えられたかたち常に存するのではなく、例外的な事例にとどまることがある。たとえば認識を得るには歴史的な現実が開かれることを要し、あるいはそれがあってはじめて緒に就くのだが、それゆえ現今の問題性に触れるのは認識獲得の触手の先端において辛うじてということも屢々である。しかしその時々課題の現実に通じる問いが成り立つのは、正にその先端においてである。言い換えれば、意義大きい行動の可能性への問いかけである。ここでは議論の口火を切ったという程度だが、研究方法がこの実践的な可能性に影響することを念頭におきつつ、システムティックに厳密さをめざした調査がもとめられる。

64) 参照, Rolf LINDNER, *Die Angst des Forschers vor dem Feld. Überlegung zur teilnehmenden Beobachtung als Interaktionsprozeß*. Mschr.Ms. Berlin 1979, S.20.; また次を参照, Lauri HONKO, *The Role of Fieldwork in Tradition Research* (前掲注 54), p.69. ここには次の一節が入っている。《重要なのは、研究の対象となってきた人々がリサーチの過程に影響をあたえる機会や、アクティヴに参加する機会をもつこと、あるいは彼ら自身がある種の(つまり彼らが受け入れることができるような)リサーチ・プロジェクトの開始にあたってイニシアティヴを発揮できることである》。: また目下印刷中の次の文献にも注目したい。Ina-Maria GREVERUS, *Lokale Identität durch Dorferneuerung?* [訳者補記] グレヴェルスのこの論考はパウジンガー編集の次のドイツ民俗学大会記録の一篇。参照, Konrad KÖSTLIN und Hermann BAUSINGER (Hg.): *Heimat und Identität. Probleme regionaler Kultur*. 22. Deutscher Volkskundekongreß in Kiel vom 16.-21. Juni 1979.(= Studien zur Volkskunde und Kulturgeschichte Schleswig-Holsteins, 7). Neumünster 1980.

## 訳注

- p.128 フォルクスクンデ (Volkskunde 民俗学) 《民俗学》と訳される語であるが、ドイツ語では《民のしるべ／民についての知識》といったやや古風な言い方であることに加えて、第二次世界大戦後は前代の濫用のとがめからこの名称がイデオロギー色をもつものとみられた。それもある様々な代替名称が提唱され、今日では多くは《ヨーロッパ・エスノロジー》が掲げられることが多い。パウジンガーもその主催する研究所を《経験型文化研究》と改名した。しかし《フォルクスクンデ》は良くも悪くもドイツ民俗学がそのレッテルの下に系譜をつくってきた事実は無視できず、その意味で批判をこめて継続させるという姿勢をパウジンガーは示している。
- p.128 ファルケンシュタインにおける討論会 (Falkensteiner Arbeitstagung) : 1970 年 9 月 21 日から 26 日までヘッセン州の保養地ファルケンシュタインの当時存在した成人大学 (Heimvolkshochschule [= HVHS] Falkenstein) を会場にして開催された《ドイツ民俗学の学問名称と研究方法に関する》ドイツ民俗学会のワークショップ。企画の呼びかけ人は当時フランクフルト大学の教授であったヴォルフガング・ブリュックナーで、翌 1971 年に「ファルケンシュタイン・プロトコル」がブリュックナーによって編集・刊行された。このワークショップはドイツ民俗学の今日に至る推移の転回点として知られており、特にパウジンガーの理論がドイツ民俗学界に定着する節目となった。
- p.129 ビャルネ・ストックランド (Bjarne Stoklund 1928-2013) : デンマークのコリング (Kolding) に生まれたデンマーク人のノンフィクション作家。
- p.131 グンナー・ミュルダール (Karl Gunnar Myrdal 1898-1987) : スウェーデン中部ダーラナ州グスタフスで生まれ、ストックホルム南郊フッディング県トローンセンド (Trångsund/ Huddinge) に没したスウェーデンの経済学者。
- p.132 マックス・ウェーバー (Max Weber 1854-1920) : エルフルト (TH) に生れ、ミュンヘンに没した社会学者。フライブルク大学教授、ハイデルベルク大学教授。経済事象を宗教との関聯で解明を試みたほか、権力の類型学としてカリスマの概念を措定し、また学問的認識の方法論についても考察を行なった。ここでの文脈では、第一回社会学者大会で、《フェルアインの社会学》の必要性を説いて研究を方向付けたことが特筆される。その場合のウェーバーの重点は、現代の市民社会において政治的エリートが形成される仕組みを問うことにあり、支配の社会学との重なりがみとめられる。
- p.133 ノルベルト・メクレンブルク (Norbert Mecklenburg 1943-L) : 当時はドイツ領であった東プロイセンの独名インスターブルク (Insterburg 露名チェルニャホフスク Черняховск/ カリーニングラード州) に生まれたゲルマニスト。テュービンゲン大学とケルン大学でゲルマニスティクを学び、ケルン大学で 1972 年に学位、1982 年に教授資格を得た。1987 年にケルン大学の員外教授となり、またイスタンブール大学の客員教授をも務め、2008 年に定年となった。ハロ・ミュラーを共著者とする《識知価値》(Wissenswerten) に関する考察は主著と言える。
- p.133 ハロ・ミュラー (Harro Müller 1943-L) : ゲルマニスト。ゲルマニスティク、歴史学、哲学を学び、1975 年にケルン大学で学位を得た。1979 年にビーレフェルト大学で教授資格を得た。1991 年に米コロムビア大学の教授となり、コーネル大学の客員教授をも務めた。レパートリーは近・現代ドイツ文藝でシュトルムに関する著作や 20 世紀ドイツの歴史小説の研究などがある。上記のノルベルト・メクレンブルクと共に識知価値に関する考察 (原注) をおこなった。

- p.134 カール・R・ポパー (Karl Raimund Popper 1902-94) : ウィーンに生まれ、ロンドンに没した哲学者。ユダヤ人、両親はキリスト教に改宗しており、ルター派の教育を受けて育った。ウィーン大学の聴講生となり、また教会の音楽院などで哲学・歴史学・心理学に関心を寄せて音楽家を志望するなど多方面の関心を示した。1918年に共産党へ入党し、しばらくリーダーの一人として活動し逮捕されるなどの波乱を経て1928年に心理学者・言語理論カール・ビューラーの下でウィーン大学から学位を得た。1935-36年にイギリス滞在の後、1937年に妻と共にイギリスへ亡命した、母親など親族はナチスのホロコーストの犠牲となった。1936年に『歴史主義の貧困 — 社会科学の方法と実践』を英語で刊行したあたりから、ヘーゲル以後のドイツ思想への批判を明確にし、それにはマルクス主義への批判にも重点が置かれた。主要著作のなかでも、1945年刊行された『開かれた社会とその敵』(*The Open Society And Its Enemy*)は大きな影響力をもった。
- p.135 ハイネ (Heinrich Heine 1797-1856) : デュッセルドルフに生まれ、パリに没した詩人。ユダヤ系だがドイツを故土とした。『ドイツ・冬物語』(*Deutschland. Ein Wintermärchen*. 1844)はすでに永くパリに半ば亡命していたハイネが、1843年に12年ぶりに母の住むハムブルクを訪れたことを機として着想された叙事詩風の韻文による紀行文。実際の旅程はブレーメンから海路でハムブルクへ向かうものだったが、作品ではケルンからハムブルクへの駅馬車での旅という設定で、囑目の光景から当時のドイツの政治的・文化的情勢が抒情的かつ風刺を交えて歌われる。なお『冬物語』はシェイクスピアのシチリアとボヘミアを舞台に設定された喜劇で、ハイネはこれをも下敷きにしている。
- p.135 ギュンター・グラス (Günter Grass 1927-2015) : ドイツ領時代のダンツィヒ (現ポ:グダニスク) に生まれ、リュベックに没した小説家。1999年のノーベル文学賞受賞者。代表作『ブリキの太鼓』で知られる。小説『ひらめ』(*Der Butt*.1977)はグリム・メルヒェン「漁師とその妻」(KHM 19)から着想され、フランソワ・ラブレーを思わせる歴史と世相と社会批判の万華鏡的描写が繰り広げられる。
- p.135 フォークロリズム (Folklorismus) : 民俗学の用語で、民俗事象 (祭り行事や民俗衣装など) が、表面上は昔ながらであるが、(現代なら現代の文化の全体の仕組みのなかで) 昔とは異なる機能と意味をもって行なわれることを言う。たとえば疫病退散の意味をもつ祈願の祭りが、その病気が根絶された今日では地域のつながりや観光客へのアトラクションや町おこしの役割になくなって継続していることなどをなす。だからと言ってそれは偽ものではなく、その時々文化の様態として解される。術語自体は少し前から現れていたが、1960年代前半にパウジンガーとハンス・モーザーによって民俗学の概念として導入された。
- p.136 タルコット・パーソンズ (Talcott Parsons 1902-79) : 米コロラド州コロラドスプリングズに生まれ、独ミュンヘンに没したアメリカの社会学者。1927年から1973年まで、ハーバード大学で教えた。構造機能分析と呼ばれる観点と手法による社会システム論で知られ、主要著作はほとんど邦訳されている。
- p.137 ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール (Wilhelm Heinrich Riehl 1823-1897) ライン河畔で現在はヘッセン州都のヴィースバーデン市域となっているビーブリヒ (Wiesbaden-Biebrich) に生まれ、ミュンヘンに没した文筆家・ミュンヘン大学教授。青年期からジャーナリストで達意の文筆家として知られた。革命ではなく社会改良を説き、その斬新な保守性が喜ばれてバイエ

ルン国王によってミュンヘンに呼ばれ、ややあってミュンヘン大学教授となった。精彩に富んだ多数の民俗記述を残し、また『学問としての民俗学』(Volkskunde als Wissenschaft.1858)という有名な講演もあって、学問的な民俗学の父とも讃えられ、今日まで高い評価を受けている。しかし他方では、リールの思想は1848年の三月革命への保守的対応という面が強く、その流麗な文章も必ずしも現実を描写したものではないという批判が、戦後は起きることになった。

- p.137 ネルソン・ブルックス (Nelson Brooks) : イェール大学 (米コネチカット州ニューヘイブン) の准教授としてフランス語教育を担当していたリングイストで、語学教育と文化理解に関する論作がある。パウジンガーは同時代のこの分野でのアメリカの諸学界の動向を追っており、それは物の見方に焦点をあてる最初期からのモチベーションによる。
- p.137 関係性社会学 (Beziehungssoziologie) : 関係性理論 (Beziehungslehre) とも言われ、ドイツ社会学におけるケルン学派の定礎者レーオポルト・フォン・ヴィーゼ (Leopold Max Walther von Wiese 1876-1969) がジムメルを独自に見直して提唱した人間の社会性に関する研究方法。社会的距離 (sozialer Abstand 人間どうしの遠近の調整)、社会的過程 (sozialer Prozess 人間どうしの距離の調整から関係の解消を含む動き)、社会的空間 (sozialer Raum 関係が結ばれる場)、社会的形成体 (Soziales Gebilde 特に中間集団としての様々な団体に重点が置かれる) の4つが指標とされる。社会学者アルフレート・フィアcantはこれが社会学の中心になると説いたが、ナチス期を挟んで研究は停滞し、戦後は復活しなかった。歴史性を捨象しているのも特徴である。クラブ・組合 (Verein) を民俗研究の対象として重視してきたパウジンガーはこの理論をも振り返ると共にその限界にも注目した。
- p.137 ゲルハルト・A・リッター (Gerhard Albert Ritter 1929-2015) : ベルリンに生まれ没した歴史学者・政治学者。テュービンゲン大学とベルリン自由大学 (FU) において歴史学・政治学・ゲルマニスティクを学び、1954年にFUで学位を得、1961年に19世紀イギリスの労働運動の研究によって同大学で教授資格を得た。FUの政治学の教授 (1962-64)、ミュンスター大学 (i.W.) の近代史の教授 (1964-74)、ミュンヘン大学の近・現代史の教授 (1974-94) を務めた。ドイツにおける近代社会史の開拓者の一人で、またドイツ再統一に関する研究と発言でも知られる。
- p.138 ジェラルド・L・ポツイウス (Gerald L. Pocius) : イギリス系カナダ人の歴史学者・フォークロリスト。ニューファンドランド・メモリアル大学で社会学とフォークロアを学び、1975年に同大学でMA、ついでペンシルヴァニア大学で1979年PhDを得た。メモリアル大学の研究教授となり、また同大学では1977年から2016年まで教壇に立った。
- p.139 ジョン・L・フィッシャー (John L. Fischer) : 不詳だが、原注に挙げられた報告には1959年にメキシコ・シティで開催されたアメリカ人類学会で発表したとある。また論文を仕上げ掲載するにあたっては、(この時期のアメリカの文化人類学の代表者である) Herbert Barry III, Irvin L. Child, Clyde Kluckhohn, George P. Murdock, David Riesman, John Whiting から指導や助言や応援を得たと記されている。
- p.140 イヴォンヌ・R・ロックウッド (Yvonne R. Lockwood) フィンランド系アメリカ人をレパトリーとし、絨毯の研究などがある。ミシガン州立大学の文化人類学の教授であった。
- p.142 サーヴィスエコノミー社会 (Dienstleistungsgesellschaft) : 成熟した工業社会では第三次産業の比重が高くなることから作られた言い方で、こう訳しておく。
- p.144 ルードルフ・ブラウン (Rudolf Braun 1930-2012) : スイスのバーゼルに生まれ没した歴史学

者・民俗学者。フライブルク (i.Br.)、バーゼル、チューリヒの諸大学で歴史学と民俗学を学び、1960年に「19,20世紀における村落部の工業社会の文化変容」の研究によりチューリヒ大学で学位を得た。ドルトムントで学術助手、次いで米シカゴで研究員を経て、1964年にベルリン自由大学 (FU) で教授資格を得た。以後、外国人労働者の研究にも取り組んだ。1966年にFUの講師、1968-71年には正教授として社会史・経済史を担当した後、1971年からチューリヒ大学においてスイス近・現代史の正教授を務めて1995年に定年となった。バーゼル大学のマツミュラー (Markus Theodor Mattmüller 1928-2003)、ベルン大学のグルンター (Erich Kurt Paul Gruner 1915-2001) と共にドイツ系スイスの社会史研究の開拓者であった。

p.144 ビリー・エーン (Billy Ehn 1946-L) : スウェーデンのエスノローグ。同国北部のウメオ大学 (Umeå universitet) 教授。工業労働者の研究を専門として、スウェーデンの他、ポーランドと旧ユーゴスラヴィア地域でも現地での参与観察を行ってきた。

p.144 ハリル・ナルマン (Halil Narman) : ドイツの大学の社会科学の分野におけるトルコ人学者の走り、トルコ人のドイツ社会への参入について《一時の同化》(temporäre Akkulturation) の概念を立てた原注の著作が代表的である。

p.145 ラウリ・ホンコ (Lauri Honko 1932-2002) フィンランド南部ハンコ (Hangö) に生まれ、トゥルク (= オーボ Turku : Åbo) に没したフィンランドのフォークロリスト。1959年にヘルシンキ大学で民間療法の研究で学位を得た。1961年に同大学のフォークロリストの講師、1963年からはトゥルク大学においてフォークロリストと宗教学の特任教授、1971年に正教授となった。1972年にトゥルク大学に「フォークロア研究所」(Nordic Institute of Folklore) を設立し、また1974年から1989年まで「国際口承文藝学会」(Internationale Gesellschaft für Volkserzählforschung / Société Internationale pour l'investigation des narrations populaires / International Society for Folk Narrative Research, ISFNR) の会長を務め、1983年には来日した。

p.145 フェルアイン (Verein) 多種多様なクラブ・組合の総称。業界の連絡組織からホビーの集まりまで、学会組織やNPOまで幅広い中間団体で、西洋の日常生活の網の目となっている。法人化されると、ほぼ日本の社団法人にあたるが、またそれに至るまでの結集を広く指す。

p.146 マルティーン・ヴァルザー (Martin Walser 1927-L) : バイエルン=シュヴァーベン地方ボーデン湖畔ヴァッサーブルク (Wasserburg / Bodense) に生まれた小説家。レーゲンスブルク大学とテュービンゲン大学で文藝学・哲学・歴史学を学び、1951年にカフカ研究で学位を得た。「グルッペ47」の一人として作家活動に入った。ギュンター・グラスやジークフリート・レンツと共に現代ドイツを代表する作家の一人とされる。

## [解説]

本篇はドイツの民俗学者ヘルマン・バウジンガーの論考「民俗研究の特質について」の全訳である。はじめに書誌データを挙げる。

Hermann Bausinger, *Zur Spezifik volkskundlicher Arbeit*. In: Zeitschrift für Volkskunde, Jg.76 (1980), S.1-21.

これからも知られるように、ドイツ民俗学会の機関誌上、1980年の発表であった。パウジンガー（1926-L 永くテュービンゲン大学教授）についてはこれまで本誌でも何度も取り上げており、また訳書数点にも解説をつけているため、ここでは著作目録や一般的な説明は省いて、本編に絞った解説としたい。

これが発表された時期、パウジンガーはすでに主要著作の多くを刊行しており、ドイツ民俗学のなかで中心的な位置にあった。パウジンガーの民俗学は1959年代末からで、また1970年のファルケンシュタイン討論会などが節目になってその理論はドイツ民俗学界の共通の基礎理論となりつつあった。しかしその後もパウジンガーは、民俗学のあり方をめぐって、折に触れて軌道の調整に参加した。本篇もその一つで、テーマは民俗研究の特質の再検討である。ここで特質として取り出されたものは、先ずは民俗学の弱点であるが、それを押さえた上で長所に転換するための手立てを探っている。そういう形での方法論だが、それが必要かつ必然的な状況があったのである

## 民俗研究の特質の再構築

先ず、本篇のはじめの辺りで取り上げられる専門分野としての基本の問題がある。パウジンガーが指摘するまでもなく、と言うべきか、民俗学には奇妙な特徴ないしは習性がある。それは専門分野の全体ではなく、部分領域の独立性あるいは小さな城構えが当然のことのようになっていることである。祭り、食生活、家屋、メルヒェン、これらが小さな独立王国のように並列しており、関聯して検討されることは少ない。社会学に比べて民俗学が学問として脆弱であることはすでにここにおいて明らかである、とパウジンガーは言う。社会学では、地域社会学、産業社会学、藝術社会学、世代と性差の社会学といった対象はまるで異なったものであっても、先ず社会学とは何かという分母を問うことが起点になる。ところが民俗学では、食生活の研究とメルヒェン研究がどのようにして同じ視点から取り組むことができるのか、という専門分野としての方法論が論議されることはほとんどない。それは、民俗学の生成以来の欠陥に由来する、と考えられるが、研究者ですらそこに疑問を向けることが少ないことを併せての欠陥である。原因は、何か基底的なものと接しているような手応えにある。たしかな土台に立っているような感触と言ってもよい。この感触を、祭りにも食生活にも家屋にもメルヒェンにも得るのである。本当は、相手にしている何か基底的なものが本当にそうであるのかを問う必要があるが、正にその感触ゆえに問いは掻き消える。民俗学の脆弱性とはこのマジックにあるが、ではそれにどう対処すべきか、これをパウジンガーは掘り下げてゆく。しかしその理論の全体はここでのテーマではない。もちろん本篇の前半の視点と認識の考察も興味が尽きないもので、解説へと誘われはするが長めになる恐れもあり、ここでは思い切って後半の具体的な話題に絞ろうと思う。

民俗学の見直しにおいてバウジンガーが早くから取り組んだ重点の一つは、社会学の手法を活用して現代社会を分析するという方法であった。それは民俗学が現代社会に向き合う有効な手立てでもあり、反響も大きかった。もとより社会学への接近やその手法の応用へと進んだのはバウジンガー独りではなかったが、その試みのなかの最も成功した事例と言えるだろう。かくして民俗学社会学への傾斜が一つの潮流となった。

本篇の書き出しがそれにあたるが、社会学を意識しつつ従来の民俗学の行き方を相対化する意義は小さくなかった。たとえば、伝統的な生活様態のなかの特に《故習》に視野を限ることからの解放である。故習への関わり方は一世紀以上の民俗学の歩みのなかで強固で整ったシステムとなっていたからである。キーワードでは《民のいとなみ》であり、民俗研究者がそれを再構成するにあたっての重点項目のシステム、すなわち《カノン（教義化された項目体系）》である。逆から見れば、研究の軸足を社会学に近づけるのは、《民のいとなみとの決別》であり、《カノン》批判であった。

しかし社会学に（全面的ではないにせよ）指針をもとめる改革運動はそれまでにない成果をもたらすと共に、それが10年20年と蓄積されるなかで新たな問題をも浮上させた。それが先鋭に表面化したのは、社会学が得意とするリテラシーである統計においてであった。たとえばアンケート調査において項目別の集計を行うという手法である。実態が数値化されるために、優れて科学的な印象をあたえることにもなる。しかしそれが実態を把握しているであろうか、という疑問が起きたのである。バウジンガーの本篇の後半はこの問題を扱っている。しかもすこぶる論理的な組み立てをとっている。本篇の中ばあたりで社会と文化の相関、並びにそれへの民俗学の立ち位置という大きな問題が設定され、それを受けて最後の三分の一では、調査研究における《ハードな方法》と《ソフトな方法》の対比へと絞られてゆく。

行論を追うのはそう難しくないはずであり、また原文には設けられていない小見出しが理解を容易にすることになっていることが願われる。それもあって、改めて要約を試みるよりも、以下ではむしろ関聯する動きに触れようと思う。本篇そのものへの注解からはみ出すことになるが、バウジンガーの刺激が後進たちにどのように受け継がれたかに注目しようと思う。もとより関係者は、単なる反復者ではなく、それぞれに工夫を凝らしている。それゆえ大きな方向では重なるが、そこにはまた各人の持ち味がある。その対比は、ドイツ民俗学の推移の一齣を伝えることにもなり、またここでのテーマの理解を容易にするだろう。

## （ウッツ・イエグレ）

社会学への接近とそれと絡んだ調査研究における《ハードな方法》と《ソフトな方法》は、

数年後にバウジンガーの高弟のウッツ・イエグレ (Utz Jeggle 1941-2009) によっても取り上げられた。イエグレが編者となった論集『フィールドワーク:文化分析における質的方法』(1984年)である。なおそこでの指針論文でもあり最も長い論説でもあるイエグレの寄稿は少し前に本誌に訳出した。

ウッツ・イエグレ (著) 河野 (訳) 「民俗研究のフィールドワークとその変遷」『文明 21』第 42 号 (2019 年), pp.163-214.

その論説は次のように始まる。

民のいとなみとの決別は、従来の民俗研究の方法を見限ることでもあった。情報提供者は偶然の手助けにすぎず、その人物からの聞き取りや会話は学術めいた暈光でしかないとの批判が起きていた。代わって厳密性と科学性が保証されるものとして称揚されたのは統計であった。

またそれがドイツ民俗学の改革の広まりと重なること、さらに論者がその動向に参画したことが回顧される。

社会学との接続に焦点がしぼられたのは 1968 年以後のことであった。テュービンゲン大学でも、文化社会学が専門分野 (=民俗学) の名称として最も歓迎されてもよいくらいだった。……その頃、筆者も統計学のコースに通って SPSS ([訳注] IBM の統計解析ソフトウェア・パッケージ) を習ったものだった。実際、数字が 50% 以上のスペースを占める民俗学の論文を書いてどこかに載せることを、筆者は永く目標にしていた。

しかし社会学への接近とその手法への依拠には問題が伴うことも明るみに出てきた。つまりバウジンガーの本篇と同じ背景であり、イエグレはそれをエスノグラフィーの見直しとして考察した。特に、民俗学の実地調査の方法では、グリム兄弟とヴィルヘルム・ハインリヒ・リール、さらに文化人類学のブロニスワフ・マリノフスキーとそのドイツでの受容を経て現代の試行錯誤まで、学史を飛び石づたいにたどってフィールドワークの方法を選択的に検討し、民俗学らしい調査方法をさぐったのである。

なおイエグレが《量的方法》と《質的方法》と呼んだものは、本篇の《ハードな方法》と《ソフトな方法》とほぼ照応する。これについてはバウジンガーがアンケート調査を例にとって分かりやすく説明している。アンケートの何十、時には 100 を超える質問項目と

なると、チェックを入れたり《はい or いいえ》を選択させるフォームが採用されることが多い。それが集計を経て提示されると、すこぶる科学的な印象を受ける。しかし数値が実態をどのように写し取っているかについては疑念が起きる。数値はそれぞれの局面における平均値であることが多い。しかし、元の調査の現場に焦点を当てると、インフォーマントはかなり多くの質問項目について、チェックを入れるべきか迷ったり、はいともいいえとも一概には言いかねると躊躇するのが普通であろう。活きた現実、むしろ両極のあいだでグラデーションを呈していることが多いと言ってもよいくらいである。また躊躇には個人差が大きく、しかも同じ尺度では測れないものが少なくない。そこに目をつぶって敢行する調査は（それに見合うプラスの成果につながる面もあり）一概に否定できないが、『観察を再話する代わりに、極端に言えば、中間値の物語をつくってしまう』（p.146）リスクがつきまとう。

さらに別の次元の問題だが、民俗学あるいは社会学の調査の場合、調査者と被調査者の関係も改めて浮上する。研究者と客体という古典的な科学的姿勢はもはや優勢ではあり得ない。イエグレの論説ではむしろこの点に特に力点がおかれているが、そこには研究者の立脚点という要素もからんでくる。これについては次に少しふれるが、それも含めて質的な調査方法はそれはそれで新たに課題を抱えることになる。もとより刺激源は本篇だけではないが、ここにも表れたパウジンガーの問題意識は高弟に一層の考察を促したのである。

## （アルブレヒト・レーマン）

本篇でもその一端が示されたパウジンガーの問題意識は、他にも多くの後進を刺激した。原注（59）に名前がアルブレヒト・レーマン（Albrecht Lehmann 1939-L）もその一人で、イエグレなどパウジンガーの高弟たちと同世代である。レーマンは口承文藝研究の中心地でもあるゲッティンゲン大学の民俗学科に学んだが、その世代らしくパウジンガーの理論を共通の知見とし習得した。見ようによれば、パウジンガーの理論を構成する脈絡の幾つかを最も生産的に発展させた研究者である。特に二つの脈絡が挙げられよう。一つは集団形成、具体的にはフェルアイン（クラブ・組合）への着目、もう一つは語るという営為である。1975年の学位論文は「労働者村の暮らし」（1976年刊）との取り組みで、社会学に傾斜したその町村体研究の重点はフェルアインに置かれていた。また1981年の教授資格申請論文は「語り営為の構造と人生：自伝の調査研究」（1983年刊）であるが、それにはパウジンガーが口承文藝研究に本格的に導入した《世間話》の研究の手法が活用された。レーマンは2010年に来日しており、また論説も多くが邦訳されている。《森のフォークロア》も含めて、翻訳のほとんどは《語り》、《オーラル・ヒストリー》、《語りの意識分析》に関わる著作と論文である。なおレーマンの日本への紹介とその知見の習得・活用では、岩本通

弥東京大学教授を中心とする人々の活躍がめざましく、専門誌の他、最近も口承文藝の論集が編まれている。

日常と文化研究会（編）『日常と文化』特に第6～8号（2018-2020）所収の諸論、法橋量「日常の語りと世間話—レーマンの《経験について語ること—語りの文化学的意識分析》を中心として」（第6号）等。

岩本通弥（編著）『方法としての〈語り〉—民俗学を超えて』ミネルヴァ書房 2020（レーマンの論説・コラム数篇に邦人12人の論説を併せている）

岩本通弥・法橋量・及川祥平（編）『オーラルヒストリーと〈語り〉のアーカイブ化に向けて—文化人類学・社会学・歴史学との対話—』成城大学グローバル研究センター 2011.

識名章喜・大淵知直（訳）『森のフォークロア：ドイツ人の自然観と森林文化』（法政大学出版局 2005.

したがって日本で最もよく知られた一人であるが、日本での理解では、先に挙げた二つの脈絡の一方が、もう一つの関心の陰に隠れているきらいがある。ちなみに訳者が少し前に紹介したのはレーマンのその方面の知見に関係している。

アルブレヒト・レーマン（著）河野（訳）「ドイツ社会とクラブ・組合—民俗学の視点から—」愛知大学国際問題研究所『紀要』第154号（2019）, pp.85-114.

訳者の場合は、集団形成への関心の一環であるが、これがレーマンの《語り営為》の研究における一方の軸足であることにも注目を促しておきたい。

中身にふれると、（第二次大戦中など戦時体験をも含めた時間幅において）現代に生きた（あるいは現に生きている）人間の語るという営為、それをどう把握するかは難しい課題である。が、社会学から学んだ《ハードな方法》ないしは《量的方法》から、今一度エスノグラフィーならではの《ソフトな方法》ないしは《質的方法》へと進んだことでは、レーマンはイエグレと問題意識を共有するところがある。《日常の語り営為》の把握は、むしろエスノグラフィーに立ち返って新機軸を探るのに適した課題でもあったろう。

## （対比）

最後に簡単な対比である。研究の共通の土台と言ってもよいパウジンガーの理論と、それに刺激された後続の世代のあいだでは当然にも趣の違いや力点の置き方に幅があり、探ってゆくと微妙な差異が見えてくる。事実、伝統的な語り物の諸ジャンルとの関係だけでなく、日常の語り営為に走る法則性をどの次元で把握するかについては、パウジンガーとレーマンの間にはやや開きがある。事例を挙げての検討は別の機会とするが、傾向という程度なら、簡単な対比はできるだろう。レーマンは、語り営為の型を状況（社会的情勢だ

けでなく場の雰囲気)との関わりにおいて探っている。すなわち、語る人間のその時々  
の諸条件の把握に殊のほか注意を払っている。

語り手の諸条件への注目はバウジンガーもそうであるが、その位置づけがやや異なる。  
バウジンガーの場合、主に問われるのは物の見方への関心である。人間はまったく白紙  
で世界に向き合っているのではなく、何もかもを一から考えたり感じたりしているわけ  
でもない。現実には、必ず何らかの思考と感情と表現のモデルをたずさえている。先  
入観や身構えや言語表現(身振りも含めて)の決まった型であるが、それまた何層にも、  
あるいは何段階にもなっている。たしかに特定の(あるいは特殊な立場の)人々の姿勢は、  
当該の人々に独自ではあろう。しかしさらに掘り下げると、研究者とインフォーマントは  
同じあるいは同種のさまざまな先入観や身構えや表現の型を共有している。比喩をもちい  
れば、同じ電車に乗り合わせ、同じ床の傾斜と振動を共有しているということになる。し  
たがってインフォーマントは、場合によっては観察者自身がその立場になってもおかしく  
ない存在である。バウジンガーの関心が古代や中世には向かわず、ほとんど専ら近・現代  
であるのは、その構図が成り立つ状況の時代だからという面がある。また観察者とインフ  
ォーマントの共通の条件への重視は必然的にかなり大きなトレンドを主眼にすることにな  
る。つまり近・現代、場合によってはポスト・モダンに生きる者としての他者(インフ  
ォーマント)であり、同時に自己である。

そう見ると、バウジンガーの理論を活用した後進が、突きつめると、まずは自若たる観  
察者として対象に向かう種類であるのとはかなり違ったものであることが分かってくる。  
またそこから、後者がその姿勢ゆえの工夫を要したことも了解できる。イエグレの場合は、  
観察者と観察される者という立場の決定的な違いを架橋しようとする悲痛なまでの良心性  
が特徴である。インフォーマントに調査の意図を隠して、あるいは調査者であることを秘  
して臨むことへの過剰なまでの自省であり、時にそれは罪悪感にまで高まり、試行錯誤が  
繰り返される。他方レーマンの場合は、インフォーマントが位置する場の雰囲気を探り当  
てる細やかな手付きによって距離を和らげようとする志向が方法となっている。したがっ  
てバウジンガー、イエグレ、レーマンは三者三様である。しかしいずれの場合も、統計や  
数値化(これに意義があることは否定できないが)を優先させるのを抑えたエスノグラフ  
ィーの新たな局面への対応であった。

Nov. 2020. S.K.